

## 青年期の選択場面における勇気尺度作成の試み

### ——漸成発達理論の枠組みから——

立教大学大学院現代心理学研究科 堀合 俊博

**An approach to constructing a scale of courage when facing a choice for adolescents from the concept of epi-genetic theory**

Toshihiro Horiai (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

This study aimed to construct a scale of courage when facing a choice for adolescents based on the metaphor proposed by Erikson to symbolize the transition from adolescence to adulthood, a trapeze. In Study 1, two scales were constructed : a scale of courage when facing a choice and peripheral concepts of courage scale. Their reliability was tested. In Study 2, the construct validity of these scales was examined by an analysis of the correlation between these scales and existing scales based on Erikson's Theory. Both scales were shown to have high reliability and validity.

**Key words :** courage, adolescence, epi-genetic theory, identity, adulthood.

昨今、新入社員の離職率の高さや、非正規雇用であるフリーター、ニートの増加が社会問題として取り沙汰されるようになって久しい。これらは、小此木 (1978) や西平 (1990) が指摘した青年期の長期化や、人格発達が未熟なまま社会へ出ていく青年たちなどの問題が、さらなる顕在化を示した様を表しているのではないかと考えられる。

青年期の問題を考えるにあたって、Erikson, E. H. の漸成発達理論が有用である。Erikson (1950 仁科訳 1977) は、人間の発達段階を8つに分け、各段階においてそれぞれもっとも重要となる発達の主題が漸成的に発生し、それぞれの主題を解決することが次の段階の主題の解決につながるという漸成発達理論を提唱した。漸成発達理論における第V段階である青年期の発達主題は、アイデンティティの獲得対拡散である。アイデンティティとは、“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我) が、他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致す

る経験から生まれた自信 (Erikson, 1959 小此木訳 1973, p.112)” のことを意味している。大野 (2010) は、青年期においてアイデンティティが発達主題とされていることは、青年が将来の自分の人生を選び、キャリアのスタートラインに立つ覚悟を決めることの重要性を意味していると述べている。つまり、青年は青年期においてそれまでの自己の意味や自らの望むものを問い直し、社会的な存在として本格的に生きていくための心積もりをしなくてはならない。したがって、成人 (おとな) になれない若者たちの問題は、青年期においてアイデンティティの獲得という発達主題を解決することができず、成人期以降の将来のキャリアをスタートする覚悟ができていないことが原因であると考えられる。

#### Erikson 理論における“空中ブランコ”

Erikson (1964 鑑訳 1971) は、青年が成人になることについて、次のような記述をしている。

“丁度、空中ブランコの曲芸人のように、すごい動きの真只中で、若者は、安全な幼児童期の横棒を離して、成人の世界のもうひとつの別の安全な横棒をがっちりとかまねばならないのである。そして、これが可能なのは、過去と未来との間の関係が密着していることと、手を離しても、次に彼を‘受け入れてくれる’ものがあるという信頼感があるかによって決まるのである (Erikson, 1964 鑑訳 1971, pp.83-84)”。これらの記述を、漸成発達理論の概念から解釈すると、次のような意味合いを持っていると考えられる。まず、“安全な幼児童期の横棒”とは、漸成発達理論における幼児童期の発達主題を解決することを意味している。同様に、“成人の世界のもうひとつの別の安全な横棒”とは、成人期以降の発達主題の解決を表している。そして、成人の世界のブランコに飛び移るためには、幼児童期の横棒が安全であること、つまり発達主題を解決していることが必要不可欠である。このことは、青年期までのそれぞれの発達段階における主題を解決することが、後の成人期以降の発達主題の解決を促す、といった解釈が可能である。

さらに、そういった“幼児童期”から“成人の世界”へ移行するための条件として、“過去と未来の間が密着していること”と、“手を離しても、次に彼を‘受け入れてくれる’ものがあるという信頼感”があげられている。“過去と未来が密着している”ことは、時間的展望の感覚を意味していると考えられる。時間的展望の感覚とは、漸成発達理論における第Ⅰ段階の発達主題である基本的信頼感が、青年期において顕在化する様であり (Erikson, 1959 小此木訳 1973)、未来に対して明確で具体的な予測が立つこと (大野, 2010) である。さらに、“手を離しても次に彼を‘受け入れてくれる’ものがあるという信頼感”とは、漸成発達理論における基本的信頼感の定義とほぼ同じ意味合いをもっている。基本的信頼感とは、他者ひいては世界は信頼に足るものであり、自分は信頼されるに足る価値があり、自分は受け入れられているという感覚のことである。これは空中

ブランコの例えにおける、“受け入れてくれる”という信頼感”と同義であることが考えられる。よって、空中ブランコの喩えにおいて、“成人の世界”への移行の条件は、共に基本的信頼感の獲得の重要性を意味している。

以上のことから、Erikson (1964 鑑訳 1971) の空中ブランコの喩えは、青年期から成人期への移行場面においては、基本的信頼感を前提とした青年期までの発達主題の解決が、成人期以降の健康は自我発達に有用にはたらく、といった解釈をすることができる。よって、空中ブランコの喩えは漸成発達理論に寄り添った表現だと言えよう。

ここで、Erikson (1964 鑑訳 1971) があえて青年期から成人期への移行を“空中ブランコ”という喩えを用いて表現した理由について考えることは、青年期から成人期への移行に焦点を当てる上で有用な考察を促すことであるように思える。Erikson (1964 鑑訳 1971) は、漸成発達理論において人は青年期から成人期へと必然的に移行していくといった意味合いだけではなく、空中ブランコの喩えを用いることによって、その困難で不安を伴うような様を表したかったのではないかと考えられる。青年期において、若者は社会的な存在としての自覚をもつことを余儀なくされ、それまでの自分の生き方を見つめなおし、社会が認めるあり方と自己が望むあり方との折り合いをつける必要性が生じてくる。そういった中で、自らの主体的な意思決定により、自己の進むべき生き方を選択することは困難が伴い、また勇気が必要とされることである。つまり、Erikson (1964 鑑訳 1971) の空中ブランコの記述は、そういった青年期における主題であるアイデンティティの獲得＝将来のキャリアのスタートラインに立つ上で、漸成発達理論における健康な自我発達に加えて、覚悟を持って成人の世界へ飛び移る勇気の必要性を表現しているのではないかと考えられる。

本研究では、漸成発達理論に基づき、青年期から成人期への移行にあたって、進路選択や生き方の選択などといった、“選択場面における勇気”

について考察する。

## 勇気の定義づけ

ひとくちに勇気と言っても、その表れ方はさまざまである（たとえば、異性に告白する、バンジージャンプに挑戦するなど）。しかしながら、それぞれの勇気について共通して言えるのは、勇気を発揮する当人がいかなる状況下においても内なる主体性や意志で何らかの大きな決断をし、行動しているということである。そこで本研究では、勇気を“困難や悪い結果が予想されていたとしても、ある行動を起こすに十分な動機付け”と定義した。

しかしながら、広範な勇気という概念を取り扱うにあたって、さまざまな勇気の表れを十把一絡げにしてしまう可能性や、研究における恣意性を避けることが必要であると思われる。よって、本研究では研究の焦点を絞るために、前述の Erikson (1964 鑑訳 1971) の空中ブランコの喩えにおける、青年期から成人期へ移行する上での“選択場面における勇気”に限定し、他の日常場面における勇気などは取り扱わない。

## 勇気の先行研究

ところで、心理学の領域において勇気を研究したものの中に、Peterson & Seligman (2004) の Value In Action- Inventory Scale (以下、VIA-IS) がある。この尺度は、ポジティブ心理学の視座に立って作成されたものであり、人間の徳性について記述されたさまざまな領域の文献から、その徳目を抽出し、尺度化したものである。VIA-IS では、知恵・知識、勇気、人間性、正義、節度、超越性といった6つの概念を下位尺度としている。さらに、勇気の下位概念として勇敢、勤勉、誠実性、熱意があげられている。なお、VIA-IS 作成にあたって、Erikson, E. H. の記述を参考にしたとされている (Peterson, 2006 宇野訳 2010)。

しかしながら、本研究では前述の通り青年期から成人期への以降といった選択場面における勇気において限定して取り扱い、さらには Erikson, E.

H. の記述に則り、漸成発達理論に寄り添ったものとしての勇気について考察することにより、青年期の課題としてのアイデンティティ感覚の獲得や、進路選択や生き方の選択へ向かう過程における人格発達についての理解へと繋がることが考えられることから、先行研究とは異なる新たな尺度を作成することにした。

## 研究 1

### 目的

Erikson, E. H. の記述に基づき、青年が成人期へと移行する上での勇気に焦点を当てた尺度を作成し、その因子構造を明らかにし、尺度の信頼性を検討する。

### 尺度作成

Erikson, E. H. の記述に沿った内容の尺度を作るべく、項目作成と内容の検討を行った。項目作成にあたっては Erikson, E. H. の諸記述および漸成発達理論に基づいた記述をしている西平(1990)や大野(2010)を参考にした。項目の概念的妥当性に関して、青年心理学を専門領域とする研究者1名と検討した。項目作成の際には、次の12の下位概念を想定して作成した。

**1. 主体的選択** 大野(2010)は、“若い”から“成人”へ移行する上で、主体的な選択を行わなければ、人生を自分のものであると感じることができず、空虚感や無意味感を感じてしまうと述べている。ここでは、青年が成人の世界へと参入していく上での選択場面における主体的な選択や決断に関する項目を作成した。

**2. 自己責任** 大野(2010)は、将来後悔せずに、自分の一回きりの人生に納得するためには、自分の選択に対して自分で責任をとることが重要であるとしている。ここでは、他人に責任を転嫁することなく自分の選択に対して自分で責任をとることができるかを測定する項目を作成した。

**3. 意志の持続性** 自分で行った選択に対して、いかに自分の意志を貫き通せるかは、その選択が



いかに真剣なものであったかを知る上では重要である。ここでは、選択の意志の強さを測る上での意志の持続性に着目し、項目を作成した。

**4. 躊躇** 選択をする上で、その選択が揺らぐ瞬間というものは、躊躇してしまう時である。ここでは、逆転项目的な下位概念として躊躇を設け、項目を作成した。

**5. 代償に対する覚悟** Erikson (1964 鑑訳 1971) は、漸成発達理論における第Ⅱ段階の活力である意志 (will) に関する記述の中で、以下のように述べている。“しばしば自分の期待に反し、うちのめされた経験をしなければならないとしても、この中から人は自分で成功しないことが、どこか‘心の底’ではわかっている、それをやらざるを得ない、決意に伴う実存の逆説性を受け入れることを学ぶ (Erikson, 1964 鑑訳 1971, pp.114)”。この記述は、自分の行った意志決定によって、失敗などといった代償が伴う結果をもたらすことになったとしても、その意志が揺らぐことがないことが重要であるということの意味している。これは、前述の勇気の定義づけにも当てはまる。よって、ここでは選択場面における意志決定によって、なんらかの代償が生じたとしても、その選択をする覚悟があるかどうかを測定するための項目を作成した。

**6. 賭け** 大野 (2010) は、青年が成人の世界のスタートラインにたつことを、清水の舞台から飛び降りる喩えを用いて考察している。大野 (2010) によると、キャリアをスタートさせることは、他の選択肢を諦めることであり、それは清水の舞台から飛び降りるような、一種の賭けであるとしている。そして、そこで必要とされるのはちょっとした勇気であると述べている。このことは、Erikson (1964 鑑訳 1971) の空中ブランコの喩えにおける勇気に通ずる考え方である。ここでは、青年が思い切って自分の選択に賭けることができるかを測定する項目を作成した。

**7. 評価懸念** 躊躇と同様に、選択を揺るがす逆転项目的な概念として、周りの評価が気になってしまうということが考えられる。自分の選択に

自信が持てず、他を参照してばかりいる青年は、成人の世界へと自信を持って進んで行けない。ここでは、そういった評価懸念によって選択への意志が揺らいでしまうかを測定する項目を作成した。

**8. 冒険心** 空中ブランコを飛び移るという喩えは、日常場面におけるバンジージャンプやジェットコースターにすすんで挑戦することができるような、危険な場面や状況に対して動じない、いわば度胸があるといった意味合いにおいて発揮される勇気というニュアンスが感じ取れる。ここでは、そういった身体感覚を伴うような危険に、進んで身を投じることができる勇気を“冒険心”とし、項目を作成した。

**9. 役割実験に必要な勇気** 役割実験とは、漸成発達理論における第Ⅲ段階の青年期的な表われであり、青年期において青年が実験的にさまざまな事柄に挑戦してみることを意味する。Erikson (1968 岩瀬訳 1973) は、成人になる上で、青年期の役割実験の重要性を指摘している。しかしながら、アルバイトやインターンシップに代表される青年期特有の役割実験を行うにあたっては、まずはそういった機会にチャレンジする勇気が必要である。よって、役割実験に必要な勇気を測定することで、結果として成人の世界へと参与する場面での勇気の測定につながると考えられるので、項目を作成することとした。

**10. 投企に必要な勇気** 西平 (1990) は、成人になることを、世界と主体的にかかわりあいをもつものとしてとらえる“投企”であるとしている。投企とは、もともとは実存哲学領域の言葉であるが、西平はここでは心理＝社会的な成熟の主体的選択という意味合いで用いている。同じく大野 (2010) は、前述の清水の舞台から飛び降りる喩えを、投企という言葉でも説明している。ここでいう投企とは、数ある選択肢の中から一つの選択肢を選びとり、他の選択肢を捨象するといった意味合いがある。Erikson (1959 小此木訳 1973) は、“青年は、想像できうる限りすべての関係のなかから、人格的・職業的・性的・イデオロギー

的なコミットメントを選びとり、しかもその選択の範囲を無限に縮小しなければならぬ (Erikson, 1959 岩瀬 1973, pp.348) ”と述べ大野 (2010) の言う投企と同じことを意味する記述をしている。ここでは、そういった選択場面において一つ選択肢を選びとることができるかを測定する尺度を作成した。

**11. 誠実** Erikson (1964 鑑 1971) は、青年期の活力として誠実をあげている。誠実とは、青年が自ら選びとったものに対して、夢中になって取り組むことを指す。これは、アイデンティティの感覚の獲得を促し、将来の進路や生き方の選択などといった場面において肯定的に働くことが考えられるので、ここで取り扱うことにした。

**12. 選択や決断に向き合う勇氣** 選択場面に直面した状態で発揮される勇氣に加えて、実際に選択や決断する場面向き合おうとする上でも勇氣が必要な場合もありうる。小此木 (1978) は、オトナになれない青年たちの特徴として、常に自分の居場所を一時的で暫定的なものとし、主体的な選択や決定を先延ばしにしようとすることをあげている。このことから、選択や決断に向き合う勇氣の発揮が成人になる上で必要なことであると考えられるので、ここで項目を作成した。

下位概念ごとに尺度項目をまとめたものを、Table 1 に示した。

## 方法

**対象者** 立教大学に通う大学生 153 名を対象に、質問紙調査を行った。講義時間終了の 20 分前に質問紙を配付し、回答を求めた。回答の際に、“あまり深く考えすぎずに、直感的に回答してください”と教示を行い、質問紙においては“現在のあなたに当てはまると思われる箇所には○をつけてください”との教示文を示した。各項目に対して、“今の自分に全く当てはまらない”(1点)から“今の自分に非常に当てはまる”(5点)の5段階評定で回答してもらった。調査は2010年5月に行われた。欠損のあった8名分のデータを除いた145名を分析の対象とした(有効回答率

94.8%, 男性 65 名, 女性 80 名, 平均年齢 19.37 歳)。

## 結果

**因子分析** 分析は主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った。分析の際は、統計処理用ソフトウェアである PASW Statistcs 18 を使用した。

**分析 1** 尺度全 60 項目について、主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った。因子負荷量の低い(.35 以下)項目を 18 項目(C4, C9, C14, C16, C17, C21, C28, C29, C30, C47, C48, C49, C50, C55, C56, C57, C58, C59)削除し、固有値の減衰状況および因子の解釈のしやすさから、因子抽出を 5 因子に設定し、再度分析を行った。Table 2 に最終的なプロマックス回転後の因子負荷量および因子間相関を示す。

**分析 2** 因子 1 に多くの項目が高い因子負荷量を示していることと、因子 1 に抽出された項目群の中にいくつかの下位概念が混在していることが考えられたため、因子 1 として抽出された 18 項目を取り出し、それらのみを対象に主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値の減衰状況および解釈の可能性から、3 因子構造が見出された。因子負荷量の低い(.35 以下)2 項目(C6, C8)を削除し、プロマックス回転後の因子負荷量および因子間相関を Table 3 に示す。

**分析 3** 分析 2 において抽出した項目を分析 1 にて用いた他の項目と合わせ、再度主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った。なお、各因子の項目数を揃えるため、各因子 4 項目になるよう因子負荷量の高い上から 4 つの項目以外の 12 項目(C1, C3, C5, C7, C10, C20, C26, C27, C32, C39, C44, C46)を削除し、因子数を 7 に設定して分析を行った。結果、それぞれの因子に対して、分析 1 および分析 2 において抽出された項目と同じものが抽出され、7 因子構造が見出された。なお、項目 C38 は因子負荷量が低かったため削除した。再構成後の因子負荷量および因子間相関を Table 4 に示す。

**Table 1**  
**選択場面における勇気尺度項目**

下位概念	質問項目
1. 主体的選択	C1. 自分の意思で選択することができる C2. 自分の判断で決断することができる C3. 人生の重要な選択は、自分ですべきだ。 C4. * 選択場面では、他者に選択を任せてしまいがちだ C5. * 他人の意見を聞かないと、自分で決断することができない
2. 自己責任	C6. その選択が自分の人生を大きく変えてしまうとしても、後悔はしないと思う C7. * 失敗するのが嫌で、挑戦することができない C8. 自分のした選択が失敗だったとしても、後悔はしないと思う C9. * 失敗するぐらいなら、何もしない方がいいと思う C10. たとえ失敗しても、挑戦することに意味があると思う
3. 意志の持続性	C11. たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、頑張り続けることができる C12. * 興味のあることを始めても、それが大変なことならば長続きしないだろう C13. * 思い切って選択したことでも、それが困難ならくじけてしまうだろう C14. * 自分の選択に対して、正しかったのだろうかあとになって心配してしまう C15. 一度決めたことは、最後まで貫き通そうと思う
4. 躊躇	C16. * 選択を迫られる時は、ついつい迷ってしまうことが多い C17. * 自分の選択で失敗するかもしれないと思うと、選択を躊躇してしまう C18. * たとえ困難が待っていようと、躊躇することなく選択できる C19. * いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう C20. * あれかこれかと考えてしまい、すんなりと選択することができない
5. 代償への覚悟	C21. * 自分のした選択で自分の生活が苦くなるかもしれないと思うと、選択を戸惑ってしまう C22. たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う C23. * やってみたいとは思っている、それが困難を伴うことならば断念してしまう C24. やってみたいことのためならば、時間もお金も惜しまない C25. 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない
6. 賭け	C26. 上手くいくかどうかは分からないけれども、いちかばちか自分の選択に賭けてみたい C27. 思い切って、運に任せようと思うことがある C28. * 運任せな選択はしたくない C29. 何事も、やってみてからでないとわからないと思う C30. やってみたいと思うことには、思い切って挑戦することができる
7. 評価懸念	C31. * 自分のした選択で、他者が何と云うか気にしてしまう C32. 周りから何と言われようと、自分が求めるものを選択することができる C33. * 自分のした選択で、周りがどのように自分を評価するのかが気になってしまう C34. * 自分の意思で選択したとしても、評価されなくては意味がないと思う C35. * 人が評価するようなものを選択しようと思う
8. 冒険心	C36. 人が怖がってしないようなことをするのが好きだ C37. 危険を伴うようなことに挑戦するのが好きだ C38. 後先考えずに行動する C39. 行動してから考えるタイプだ C40. * 危ないことには挑戦したくない
9. 役割実験に必要な勇気	C41. 興味のあることには、とりあえず取り組んでみたい C42. 自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい C43. 社会経験になるので、いろんなことに挑戦したい C44. * 現状に満足してしまい、新しいことに挑戦することができない C45. * 自分には新しいことに挑戦してみようという意欲がないと思う
10. 投企に必要な勇気	C46. 人生の重要な選択において、ひとつのことを選ぶ勇気がある C47. 人生の方向性をひとつに決めないと、先には進めないとと思う C48. * 生きていく上で、選択肢は多ければ多いほどいいと思う C49. * たとえ一度選択したことでも、あとでもう一度やり直してもいいと思う C50. * たとえひとつに選択したとしても、他のものに目移りしてしまう
11. 誠実	C51. 何かに夢中になって取り組むことができる C52. 時間を忘れて何かに没頭することができる C53. 自分の好きなことには、真剣に打ち込んでいる C54. 一度夢中になってしまうと、他のことが目に入らなくなってしまう C55. * これと云って夢中になれるものがない
12. 選択や決断に向き合う勇気	C56. * 重要な選択を、先延ばしにしがちだ C57. 何かを選択するきっかけは自分でつくるべきだと思う C58. * やってみたいなあと思うことがあっても、なかなかとっかかりがつかめない C59. * きっかけばかりを探してしまい、結局はいつも行動に移すことができない C60. * 選択を迫られるような場面から逃げてしまうことが多い

\* は逆転項目  
C は Courage の頭文字である

Table 2  
分析 1 におけるプロマックス回転後の因子パターン

	F1	F2	F3	F4	F5
C11 たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、頑張り続けることができる (③意志の持続性)	.82	-.11	-.17	.20	.04
C13 思い切って選択したことで、それが困難ならくじけてしまうだろう (③意志の持続性)	-.72	.10	-.00	-.01	-.00
C1 自分の意思で選択することができる (①主体的選択)	.66	.22	-.27	-.05	-.02
C60 選択を迫られるような場面から逃げてしまうことが多い (⑫選択や決断に向き合う勇気)	-.63	.13	-.06	.09	.09
C12 興味あることを始めても、それが大変なことならば長続きしないだろう (③意志の持続性)	-.61	.12	-.04	-.07	-.07
C18 たとえ困難が待っていようと、躊躇することなく選択できる (④躊躇)	.61	-.20	.11	-.21	-.04
C15 一度決めたことは、最後まで貫き通そうと思う (③意志の持続性)	.59	-.03	-.10	.11	.14
C25 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない (⑤代償への覚悟)	.57	.19	.04	.09	.10
C2 自分の判断で決断することができる (①主体的選択)	.53	.08	-.10	-.17	-.04
C23 やってみたいとは思っている、それが困難を伴うことならば断念してしまう (⑤代償への覚悟)	-.52	.05	-.02	.05	.05
C19 いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう (④躊躇)	-.51	.19	-.01	.28	.07
C46 人生の重要な選択において、ひとつのことを選ぶ勇気がある (⑩冬季に必要な勇気)	.49	-.08	-.05	.04	.01
C7 失敗するのが嫌で、挑戦する事ができない (②自己責任)	-.47	-.18	-.20	.12	.11
C22 たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う (⑤代償への覚悟)	.45	.18	-.07	.04	-.06
C6 その選択が自分の人生を大きく変えてしまうとしても、後悔はしないと思う (②自己責任)	.44	-.05	.24	.12	.03
C32 周りから何と言われようと、自分が求めるものを選択することができる (⑦評価懸念)	.43	-.05	.13	-.28	.01
C8 自分のした選択が失敗だったとしても、後悔はしないと思う (②自己責任)	.40	.14	-.14	.10	-.06
C24 やってみたいことのためならば、時間もお金も惜しまない (⑤代償への覚悟)	.38	.04	.05	.00	.08
C42 自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい (⑨役割実験に必要な勇気)	-.10	.86	-.01	.04	-.02
C43 社会経験になるので、いろんなことに挑戦したい (⑨役割実験に必要な勇気)	-.24	.84	.03	.05	-.09
C41 興味のあることには、とりあえず取り組んでみたい (⑨役割実験に必要な勇気)	-.04	.74	.05	-.04	.13
C45 自分には新しいことに挑戦してみようという意欲がないと思う (⑨役割実験に必要な勇気)	.01	-.67	-.22	.02	.05
C3 人生の重要な選択は、自分ですべきだ (①主体的選択)	.37	.46	-.27	.06	-.01
C10 たとえ失敗しても、挑戦する事に意味があると思う (②自己責任)	.35	.42	-.07	.02	-.02
C44 現状に満足してしまい、新しいことに挑戦する事ができない (⑨役割実験に必要な勇気)	-.21	-.41	-.22	-.00	.04
C26 上手くいくかどうかはわからないけれども、いちかばちか自分の選択に賭けてみたい (⑥賭け)	.27	.36	.16	-.04	-.03
C27 思い切って運に任せようと思うことがある (⑥賭け)	-.16	.36	.19	-.06	.09
C37 危険を伴うようなことに挑戦するのが好きだ (⑧冒険心)	.15	-.05	.78	.12	-.00
C36 人が怖がってしないようなことをするのが好きだ (⑧冒険心)	.26	-.01	.72	.25	-.02
C38 後先考えずに行動する (⑧冒険心)	-.20	.02	.48	-.05	.02
C40 危ないことには挑戦したくない (⑧冒険心)	.06	-.17	-.45	.07	-.01
C39 行動してから考えるタイプだ (⑧冒険心)	-.22	.16	.43	-.13	-.02
C33 自分のした選択で、周りがどのように自分を評価するのが気になってしまう (⑦評価懸念)	-.03	-.04	.09	.74	-.02
C31 自分のした選択で、他者が何と言いか気になってしまう (⑦評価懸念)	.05	.03	-.06	.73	.03
C35 人が評価するようなものを選択しようと思う (⑦評価懸念)	.17	.07	-.03	.50	-.04
C34 自分の意思で選択したとしても、評価されなくては意味がないと思う (⑦評価懸念)	-.04	-.04	.09	.45	-.14
C5 他人の意見を聞かないと、自分で決断することができない (①主体的選択)	-.19	-.14	.07	.39	-.03
C20 あれかこれかと考えてしまい、すんなりと選択することができない (④躊躇)	-.24	.07	-.06	.36	.18
C52 時間を忘れて何かに没頭することができる (⑪誠実)	-.06	-.12	.08	-.08	.87
C51 何かに夢中になって取り組むことができる (⑪誠実)	.15	-.01	-.03	-.15	.77
C53 自分の好きなことには、真剣に打ち込んでいる (⑪誠実)	.02	.12	-.09	-.02	.68
C54 一度夢中になってしまうと、他の子と目が入らなくなってしまう (⑪誠実)	-.05	-.01	.04	.16	.56
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F1	-				
F2	.40	-			
F3	.37	.31	-		
F4	-.39	-.10	-.16	-	
F5	.19	.25	.13	-.03	-

注) ( ) 内は各下位概念を示す。

因子の命名と下位尺度間相関 第1因子は、“C43 社会経験になるので、いろんなことに挑戦したい”や“C42 自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい”など、役割実験に関連した記述のある4項目が抽出されたため、“役割実験に必要な勇気”因子とした。

第2因子は、“C11 たとえ困難な道に進むこ

とを選択したとしても、頑張り続けることができる”や“C13 思い切って選択したことで、それが困難ならくじけてしまうだろう”など、選択した意志を持続させるといった内容の項目が4項目抽出されていたため、“意志の持続性”因子とした。

第3因子は、“C52 時間を忘れて何かに



**Table 3**  
分析 2 におけるプロマックス回転後の因子パターン

	F1	F2	F3
C19 いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう (④躊躇)	-.82	.02	.25
C60 選択を迫られるような場面から逃げてしまうことが多い (⑫選択や決断に向き合う勇氣)	-.65	-.04	-.02
C18 たとえ困難が待っていようと、躊躇することなく選択できる (④躊躇)	.64	-.02	.12
C2 自分の判断で決断することができる (①主体的選択)	.62	-.06	.09
C7 失敗するのが嫌で、挑戦する事ができない (②自己責任)	-.42	-.17	-.10
C1 自分の意思で選択することができる (①主体的選択)	.40	.18	.17
C46 人生の重要な選択において、ひとつの事を選ぶ勇氣がある (⑩投企に必要な勇氣)	.38	.03	.07
C32 周りから何と言われようと、自分が求めるものを選択することができる (⑦評価懸念)	.37	.06	.24
C11 たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、頑張り続けることができる (③意志の持続性)	-.01	.72	.06
C12 興味あることを始めても、それが大変なことならば長続きしないだろう (③意志の持続性)	-.10	-.72	.15
C13 思い切って選択したことでも、それが困難ならくじけてしまうだろう (③意志の持続性)	-.23	-.68	.12
C15 一度決めたことは、最後まで貫き通そうと思う (③意志の持続性)	-.16	.64	.17
C22 たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う (⑤代償への覚悟)	-.20	.13	.72
C25 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない (⑤代償への覚悟)	.05	.06	.69
C24 やってみたいことのためならば、時間もお金も惜しまない (⑤代償への覚悟)	.17	-.25	.66
C23 やってみたいとは思っていても、それが困難を伴うことならば断念してしまう (⑤代償への覚悟)	-.15	-.10	-.40
因子間相関	F1	F2	F3
F1	-		
F2	.67	-	
F3	.57	.49	-

没頭することができる”や“C51 何かに夢中になって取り組むことができる”など、青年期に何かに夢中になって取り組むといった誠実に関する項目が4項目抽出されていたため、“誠実”因子とした。

第4因子は、“C22 たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う”や“C25 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない”など、予想される困難に対して選択への意志が揺らぐことがないといった内容の項目が4項目抽出されていたため、“困難に対する覚悟”因子とした。

第5因子は、“C37 危険を伴うようなことに挑戦するのが好きだ”や“C36 人が怖がってしないようなことをするのが好きだ”などといった、危険などに対してすすんで飛び込んでいくような内容の項目が3項目抽出されていたため、“冒険心”因子とした。

第6因子は、“C2 自分の判断で決断することができる”や、“C19 いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう”など、選択場面における決断する力に関連した4項目が抽出されていたため、“決断力”因子とした。

第7因子は、“C33 自分のした選択で、周

りがどのように自分を評価するのかが気になってしまう”や“C31 自分のした選択で、他者が何と言うか気にしてしまう”など、他人の評価によって自分の選択が左右されるといった内容のものが4項目抽出されていたため、“評価懸念”因子とした。

**勇氣の中心概念と周辺概念** “決断力”, “意志の持続性”, “困難に対する覚悟”の3因子は、分析1においてひとつの因子として抽出されており、下位尺度間相関係数が高い上前述の勇氣の定義づけに即した解釈が可能であることから、これら三つの下位概念を選択場面における勇氣の中心概念とし、これらを合わせて選択場面における勇氣尺度とした。そして、他の“役割実験に必要な勇氣”, “冒険心”, “忠誠心”, “評価懸念”を勇氣の周辺概念尺度とした。選択場面における勇氣尺度および各勇氣の周辺概念尺度との相関を、Table 5にまとめた。最終的な項目を Table 6にまとめた。

**信頼性の検討** 信頼性の検討のため、各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した。それぞれ、“決断力”因子では $\alpha = .76$ 、“意志の持続性”因子では $\alpha = .80$ 、“困難に対する覚悟”因子では $\alpha = .74$ 、“役割実験に必要な勇氣”因子では $\alpha = .85$ 、“誠実”因子



**Table 4**  
分析 3 におけるプロマックス回転後の因子パターン

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
役割実験に必要な勇気 ( $\alpha=.85$ )							
C43 社会経験になるので、いろんなことに挑戦したい (⑨役割実験に必要な勇気)	.94	-.03	-.08	-.11	-.05	.01	.04
C42 自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい (⑨役割実験に必要な勇気)	.84	-.01	.01	.08	-.03	.02	.04
C45 自分には新しいことに挑戦してみようという意欲がないと思う (⑨役割実験に必要な勇気)	-.66	-.06	.02	.02	-.17	.02	.06
C41 興味のあることには、とりあえず取り組んでみたい (⑨役割実験に必要な勇気)	.64	-.08	.15	.16	.02	-.01	-.04
意志の持続性 ( $\alpha=.80$ )							
C11 たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、頑張り続けることができる (③意志の持続性)	-.01	.72	-.01	.12	-.16	-.12	.16
C13 思い切って選択したことで、それが困難ならくじけてしまうだろう (③意志の持続性)	.02	-.69	.03	.07	-.12	.15	.06
C12 興味あることを始めても、それが大変なことならば長続きしないだろう (③意志の持続性)	.02	-.69	-.02	.10	-.09	.05	.07
C15 一度決めたことは、最後まで貫き通そうと思う (③意志の持続性)	-.00	.55	.07	.17	-.02	.08	-.00
誠実 ( $\alpha=.80$ )							
C52 時間を忘れて何かに没頭することができる (①誠実)	-.12	.01	.85	-.03	.10	.12	-.08
C51 何かに夢中になって取り組むことができる (①誠実)	-.04	.11	.76	.09	-.04	.01	-.10
C53 自分の好きなことには、真剣に打ち込んでいる (①誠実)	.16	.03	.70	-.05	-.12	-.07	.01
C54 一度夢中になってしまうと、他のことが目に入らなくなってしまう (①誠実)	.03	-.10	.61	-.10	.03	-.07	.19
困難に対する覚悟 ( $\alpha=.74$ )							
C22 たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う (⑤代償への覚悟)	.03	.15	-.16	.80	-.04	.21	-.02
C25 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない (⑤代償への覚悟)	.10	.02	.10	.64	.05	-.14	.10
C24 やってみたいことのためならば、時間もお金も惜しまない (⑤代償への覚悟)	-.04	-.15	.09	.53	.04	-.16	.01
C23 やってみたいとは思っていても、それが困難を伴うことならば断念してしまう (⑤代償への覚悟)	.04	-.17	.10	-.41	-.06	.08	.09
冒険心 ( $\alpha=.78$ )							
C37 危険を伴うようなことに挑戦するのが好きだ (⑧冒険心)	-.02	-.02	-.01	.05	.92	-.02	.02
C36 人が怖がってしないようなことをするのが好きだ (⑧冒険心)	.02	.09	-.01	.01	.81	-.05	.15
C40 危ないことには挑戦したくない (⑧冒険心)	-.24	-.08	.01	.13	-.44	-.10	.19
決断力 ( $\alpha=.76$ )							
C19 いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう (④躊躇)	-.02	-.05	-.01	.23	.00	.78	.11
C60 選択を迫られるような場面から逃げてしまうことが多い (⑩選択や決断に向き合う勇気)	.02	-.09	.03	-.08	-.03	.60	-.03
C18 たとえ困難が待っていようと、躊躇することなく選択できる (④躊躇)	-.10	.06	.01	.19	.01	-.56	-.04
C2 自分の判断で決断することができる (①主体的選択)	.09	.08	.01	.15	-.07	-.46	.03
評価懸念 ( $\alpha=.70$ )							
C33 自分のした選択で、周りかどのように自分を評価するのが気になってしまう (⑦評価懸念)	-.03	.03	.04	-.12	.09	.07	.75
C31 自分のした選択で、他者が何と云うか気にしてしまう (⑦評価懸念)	.00	.20	.06	-.07	-.02	.18	.72
C34 自分の意思で選択したとしても、評価されなくては意味がないと思う (⑦評価懸念)	.01	-.24	-.07	-.02	.01	-.20	.55
C35 人が評価するようなものを選択しようと思う (⑦評価懸念)	.03	-.02	-.02	.21	.01	.04	.46
因子間相関							
F1	-						
F2	.18	-					
F3	.21	.21	-				
F4	.26	.40	.25	-			
F5	.28	.28	.14	.26	-		
F6	-.07	-.52	-.09	-.47	-.31	-	
F7	-.06	-.22	-.11	-.20	-.08	.39	-

**Table 5**  
選択場面における勇気尺度および勇気の周辺概念の下位尺度間相関

	選択場面における勇気	決断力	意志の持続性	困難に対する覚悟	役割実験に必要な勇気	誠実	冒険心	評価概念
選択場面における勇気	—							
決断力	.83 **	—						
意志の持続性	.80 **	.53 **	—					
困難に対する覚悟	.77 **	.46 **	.40 **	—				
役割実験に必要な有機	.22 **	.11	.16 **	.26 **	—			
誠実	.18 **	.08	.19 **	.17 **	.19 *	—		
冒険心	.34 **	.25 **	.29 **	.27 **	.36 **	.12	—	
評価概念	-.29 **	-.32 **	-.21 *	-.16	-.04	-.06	-.05	—

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

Table 6  
 選択場面における勇気およびその周辺概念尺度項目

	下位尺度	項目内容
選択場面における勇気	決断力	C19. *いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう C60. *選択を迫られるような場面から逃げてしまうことが多い C18. たとえ困難が待っていようと、躊躇することなく選択できる C2. 自分の判断で決断することができる
	意志の持続性	C11. たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、頑張り続けることができる C13. *思い切って選択したことでも、それが困難ならくじけてしまうだろう C12. *興味のあることを始めても、それが大変なことならば長続きしないだろう C15. 一度決めたことは、最後まで貫き通そうと思う
	困難に対する覚悟	C22. たとえ困難が伴う道であろうとも、それが自分のやりたいことならば進みたいと思う C25. 自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない C24. やってみたいことのためならば、時間もお金も惜しまない C23. *やってみたいとは思っていても、それが困難を伴うことならば断念してしまう
勇気の周辺概念	役割実験に必要な勇気	C43. 自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい C42. 興味のあることには、とりあえず取り組んでみたい C45. *自分には新しいことに挑戦してみようという意欲がないと思う C41. 社会経験になるので、いろんなことに挑戦したい
	誠実	C52. 何かに夢中になって取り組むことができる C51. 時間を忘れて何かに没頭することができる C53. 自分の好きなことには、真剣に打ち込んでいる C54. 一度夢中になってしまうと、他のことが目に入らなくなってしまう
	冒険心	C37. 人が怖がってしないようなことをするのが好きだ C36. 危険を伴うようなことに挑戦するのが好きだ C40. *危ないことには挑戦したくない
	評価懸念	C33. 自分のした選択で、周りがどのように自分を評価するのかが気になってしまう C31. 自分のした選択で、他者が何と言うか気にしてしまう C34. 自分の意思で選択したとしても、評価されなくては意味がないと思う C35. 人が評価するようなものを選択しようと思う

\*は逆転項目

Table 7  
 各下位尺度および選択場面における勇気尺度、尺度全体の平均値、標準偏差、 $\alpha$ 係数

	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
全体	3.50	0.42	.80
選択場面における勇気尺度	3.36	0.63	.85
決断力	3.05	0.81	.76
意志の持続性	3.46	0.78	.80
困難に対する覚悟	3.57	0.77	.74
勇気の周辺概念			
役割実験に必要な勇気	4.12	0.77	.85
誠実	3.97	0.89	.80
冒険心	2.66	1.01	.78
評価概念	3.45	0.75	.70

注) 平均値は、各下位尺度の合敬得点を項目数で除したものである。

では  $\alpha = .80$ ，“冒険心”因子では  $\alpha = .78$ ，“評価懸念”因子では  $\alpha = .70$  であり、いずれも高い数値を示していた。“決断力”、“意志の持続性”、“困難に対する覚悟”因子を合計した選択場面における勇気尺度の信頼性係数を算出したところ  $\alpha = .85$  であり、下位尺度を合計した全体での信頼性係数は  $\alpha = .80$  と、ともに高い数値であった。それぞれに対して平均値、標準偏差を算出し、 $\alpha$ 係数をま

とめたものを Table 7 に示す。

### 考察

研究 1 では、質問紙調査および因子分析によって、“決断力”、“意志の持続性”、“困難に対する覚悟”の 3 因子構造からなる選択場面における勇気尺度および、勇気の周辺概念である“役割実験に必要な勇気”、“誠実”、“冒険心”、“評価懸念”

尺度が作成された。いずれの尺度も  $\alpha$  係数が高く、内的整合性を持った信頼性の高い尺度だと考えることができる。

**Erikson 理論からの考察** 選択場面における勇氣尺度の下位概念として“決断力”、“意志の持続性”、“困難に対する覚悟”が抽出されたことは、勇氣の定義づけからも妥当だと言える。青年期から成人期への移行という観点から考える上でも、若者が成人の世界へと足を踏み入れる上で主体的な決断を下すことのできる力や、自らの将来のキャリアを歩んでいくための意志を持ち続けること、失敗や困難によってもくじけずに歩み続ける覚悟があるといった内容が選択場面における勇氣の中心的な概念であるという結果が得られたことは、納得できるものである。

選択場面における勇氣尺度と“役割実験に必要な勇氣”、“誠実”との高い相関がみられたことは、成人になる上での青年期における役割実験の重要性に関する Erikson (1968 岩瀬訳 1973) の記述や、漸成発達理論における青年期の活力である誠実が、青年期の主題であるアイデンティティの感覚の獲得を促すという理論的な必然性から、妥当な結果であると言える。このことから、勇氣の周辺概念としての“役割実験に必要な勇氣”と“誠実”の概念的妥当性の高さがうかがえ、同時に選択場面における勇氣尺度が漸成発達理論に基づいた解釈が可能であることを意味していると言える。

**“冒険心”について** Erikson (1959 小此木訳 1973) は、“いちかばちかやってみる”などといったチャンスに対する活気に満ちた信仰が、幼児的な衝動や退行になりかねないと記述している。さらに西平(1990)は、成人になれない“永遠の少年”の特徴の一つとして、危険な冒険に魅力を感じるという特徴をあげ、これを地に足が付いていない空想的な幼児性への退行だとしている。このことから、本研究における“冒険心”は人格発達において負の影響を与えられられるが、下位尺度相関において選択場面における勇氣尺度およびその下位概念である“決断力”、“意志の持続性”、“困

難に対する覚悟”および“役割実験”と有意な正の相関を示している。このことは、“いちかばちかやってみる”など、危険を伴うようなことに挑戦するといった冒険心が、選択場面や役割実験における勇氣に関連しており、人格発達にポジティブな影響を与えている可能性が考えられる。このことは、Erikson, E. H. や西平 (1990) が指摘した青年の特徴と、本調査において対象となった青年の特徴とは異なっているということの意味していることが考えられる。本研究の結果から、現代の青年は、役割実験や進路選択をする上での向こう見ずな冒険心や、いちかばちかやってみるといった思い切りの良さが必要である可能性が示唆された。今後の研究において、冒険心が青年の人格発達や選択場面においてどのような影響を与えているのかといった検討を加える必要がある。

**“評価懸念”について** “誠実”や“役割実験”は、その定義から他人の評価などに関わらず、自らが主体的に行動するものであるが、本研究の結果では“評価懸念”と無相関であることから、統計的に評価懸念を示すものと示さないものが同程度数存在していることを表している結果であると考えられる。このことは、“冒険心”が Erikson (1959 小此木訳 1973) の記述とは異なった結果を示していたことと同様、現代的な特徴であることが考えられる。“評価懸念”は、選択場面における勇氣尺度と負の相関が見られるため、選択場面において青年の意思決定を揺るがしていることが考えられるので、今後の研究において、“評価懸念”が現代の青年のたちの生活や勇氣にどのような影響を与えているのかについて検討が必要だろう。

## 研究 2

研究 1 において、Erikson, E. H. の漸成発達理論の考えに基づいた選択場面における勇氣尺度および勇氣の周辺概念尺度を作成した。これらの尺度項目はいずれも漸成発達理論を念頭において作成されたものではあるが、基準関連妥当性の検討を加えるため、漸成発達理論に基づいた既存の尺度との関連を見ることは必須であり、漸成発達理

論研究の文脈の中に本研究を位置づける上でも必要不可欠のことである。よって、研究2では、研究1にて作成した尺度と漸成発達理論に基づいて作成された既存尺度との相関をみることによって、基準関連妥当性の検討を行う。

## 方法

**対象者** 立教大学に通う大学生 265 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、授業終了 20 分前に配布し、授業時間内に回収する場合と、授業終了前に質問紙を配布し、次週の授業時間に回収する場合があった。回答の際には、“あまり深く考えすぎず、直感的に回答してください”との教示を行い、質問紙においては“現在のあなたに当てはまると思われる箇所に○をつけてください”との教示文を示した。調査は 2010 年 7 月に行われた。欠損のあった 35 名分のデータを除いた 230 名（有効回答率 86.8%，男性 72 名，女性 158 名，平均年齢 19.9 歳）を分析対象とした。

## 質問紙の構成

**1. 充実感尺度 (大野, 1984)** 大野 (1984) は、青年が健康なアイデンティティを統合していく過程で感じられる生活気分を充実感と呼び、充実感尺度を作成している。本尺度は、“充実感気分—退屈・空虚感”，“自立・自信—甘え・自信のなさ”，“連帯—孤立”，“信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散”の四つの尺度からなっている。尚、本研究においては、“生活に充実感で満ちた楽しさがある”といった項目からなる“充実感気分—退屈・空虚感”尺度の 5 項目を使用した。“5. 今の自分に非常に当てはまる”から“1. 今の自分に全く当てはまらない”の 5 件法で回答を求めた。

**2. 基本的信頼感尺度 (谷, 1996)** 谷 (1996) は、Erikson, E. H. の漸成発達理論における第 I 段階の発達主題である“基本的信頼感対不信”に関する記述をもとに、新たに基本的信頼感尺度を作成している。本尺度は、“基本的信頼感”および“対人的信頼感”に 2 因子からなる尺度であるが、谷 (1998) は、“対人的信頼感”因子は、Erikson, E. H.

のいう基本的信頼感とは異なる概念であり、後の研究者によるその概念の誤解から生まれたものであるとしている。よって、本研究では“対人的信頼感”項目を除いた 6 項目の尺度として使用した。“7. 非常に当てはまる”から“1. 全く当てはまらない”の 7 件法で回答を求めた。

**3. 多次元自我同一性尺度 (谷, 2001)** 谷 (2001) は、従来の自我同一性測定尺度の問題点を指摘し、今一度 Erikson, E. H. の記述に基づいた、青年期におけるアイデンティティの感覚に焦点を絞った多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale: 以下 MEIS とする) を作成した。本尺度の特徴は、青年期におけるアイデンティティの感覚を測定するものとして作成されている点と、忠実に Erikson, E. H. の記述に則って作成されている点である。20 項目，“7. 非常に当てはまる”から“1. 全く当てはまらない”の 7 件法で回答を求めた。

**4. Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (以下 S-ESDS とする) (三好・大野・内島・若原・大野, 2003)** 本尺度は、Ochse & Plug (1986) の Erikson and Social Desirability Scale を、三好他 (2003) が翻訳し、日本語短縮版として作成したものである。本尺度の特徴は、各発達段階の項目作成において、意識的な『経験』の仕方、観察可能な『行動』の仕方、無意識的な内的状態という 3 つの次元を常に念頭においた上で、“…の感覚” (a sense of…) という観点が重要視されていることと、性別や年齢、人種にとらわれない尺度開発を目的とされていることである。58 項目，“4. あてはまる”から“1. あてはまらない”の 4 件法で回答を求めた。

**5. 選択場面における勇気尺度および勇気の周辺概念尺度** 研究1にて作成した尺度, 27項目。“5. 今の自分に非常に当てはまる”から“1. 今の自分に全く当てはまらない”の 5 件法で回答を求めた。

## 結果と考察

分析は相関分析を行い、分析の際は、統計処理用ソフトウェアである PASW Statics 18 を使用し



Table 8

選択場面における勇気尺度および勇気の周辺概念尺度と、漸成発達理論に基づいた既存の尺度と相関係数

	基本的信頼感	アイデンティティ	基本的信頼感対不信感	自律性対恥疑惑	主導性対罪悪感	生産性対劣等感	Identity 達成対拡散	親密性対孤独	充実感
尺度全体	.39 **	.43 **	.55 **	.37 **	.74 **	.66 **	.32 **	.37 **	.49 **
選択場面における勇気	.52 **	.52 **	.56 **	.57 **	.68 **	.69 **	.41 **	.33 **	.45 **
決断力	.47 **	.45 **	.45 **	.53 **	.51 **	.56 **	.35 **	.23 **	.38 **
意志の持続性	.46 **	.46 **	.48 **	.51 **	.60 **	.62 **	.39 **	.32 **	.37 **
困難に対する覚悟	.45 **	.47 **	.53 **	.45 **	.67 **	.63 **	.34 **	.31 **	.42 **
勇気の周辺概念									
役割実験	.38 **	.38 **	.52 **	.26 **	.67 **	.62 **	.28 **	.40 **	.47 **
誠実	.28 **	.32 **	.37 **	.19 **	.51 **	.42 **	.20 **	.33 **	.41 **
冒険心	.24 **	.26 **	.34 **	.30 **	.64 **	.47 **	.15 *	.17 *	.29 **
評価概念	-.37 **	-.29 **	-.12	-.49 **	-.14 *	-.22 **	-.22 **	-.05	-.06

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

た。研究1において作成された選択場面における勇気尺度および勇気の周辺概念と、漸成発達理論に基づいた既存の尺度との相関を求めた。Table 8に、各相関係数を示す。

選択場面における勇気尺度および各下位概念、勇気の周辺概念尺度である“役割実験に必要な勇気”、“誠実”、“冒険心”尺度においては、漸成発達理論に基づいた既存のすべての尺度と正の相関がみられた。このことから、これらの尺度は漸成発達理論に基づき、基準関連妥当性があるものであると考えることができる。中でも、S-ESDS尺度における第Ⅲ段階、第Ⅳ段階との相関の高さは、Erikson (1964 鑑訳 1971) が、第Ⅲ段階において得られる活力である目的性の定義を、“幼児性の空想の挫折、罪悪感あるいは罰を受けるかもしれない絶えざる不安などによっても禁止されていない価値ある目的を心に描き、実際に追求する勇気 (Erikson, 1964 鑑訳 1971, pp.118)”としており、勇気という言葉が使用されていることや、第Ⅳ段階を、“大人の世界への名目的な参与感 (Erikson, 1968, 岩瀬訳, 1973)”が得られる時期であるとしていることから、青年期から成人期への移行における勇気を測定する尺度としての内容的妥当性を示した結果であると言える。

Erikson (1964) は、漸成発達理論における活力の定義として、強さ、統制力、勇気としている。本研究はErikson, E. H. の記述に基づいた勇気の尺度化を目的としているため、本研究にて作成した尺度が研究2において既存の尺度における

各発達主題との正の相関がみられたことは、作成した尺度が漸成発達理論の枠組みから、内容的に妥当であること示していると考えられる。さらに、Erikson (1964 鑑訳 1971) は、活力を各発達段階における対となる概念の、その両方が好ましい割合で獲得している状態から得られるものとしているため、本研究における尺度が、Erikson (1964 鑑訳 1971) の活力の定義のひとつが勇気となっているように、漸成発達理論における活力の獲得と関連していることが考えられる。しかしながら、Erikson, E. H. は、各発達段階における主題の“否定的”事項を取り去った“達成”尺度への懸念を示している (Evans, 1961 岡堂・中園訳 1975)。このことは、質問紙法のような得点化された方法では、否定的な概念 (不信や恥・疑惑など) の獲得が測定できないことを示しており、厳密な意味での活力の測定はできていないことを意味している。このことを踏まえ、活力としての勇気尺度の妥当性や、活力に焦点を当てた漸成発達理論研究の方法論的な検討も必要であると考えられる。

さらに、“冒険心”が他の漸成発達理論に基づいた尺度と正の相関を示しており、研究1の結果同様、“冒険心”が人格発達上ポジティブにはたらくている可能性が示唆される結果となった。これらを踏まえ、選択場面において危険を顧みないような活気に満ちた“冒険心”の重要性が、人格発達のどのようにより獲得され、どんなはたらきをしているかについて検討することが、今後の研究

の発展につながると考えられる。

他の尺度が既存の尺度との相関がみられ、基準関連妥当性が見出されたのに対し、“評価懸念”尺度に関しては、他の尺度とは異なり、S-ESDS尺度における“基本的信頼感対不信”、“親密性対孤独”および充実感尺度との相関がみられなかった。研究1の結果でみられたように、“評価懸念”は選択場面における勇気と負の相関を示しており、他人の目や意見を気にするあまり、主体的選択ができなくなってしまうといった解釈ができることから、選択場面における勇気について考える上で、重要な概念であると言える。研究2の結果は、空中ブランコの喩えにおいて、選択場面における勇気の特徴である基本的信頼感が獲得されたものも、評価懸念を示している可能性や、アイデンティティの生活気分である充実感を感じているものの中にも、評価懸念を示しているものがある可能性を示唆するものである。今後の研究において、“評価懸念”の人格発達上の意味や形成因について検討を加える必要がある。

### 総合考察

Erikson (1964 鑑訳 1971) の空中ブランコの喩えの記述に基づき、青年が成人になる上での選択場面における勇気を測定する尺度、および勇気の周辺概念を測定する尺度が作成された。研究1においては、因子分析によって因子構造が明らかにされ、“決断力”、“意志の持続性”、“困難に対する覚悟”からなる選択場面における勇気尺度および勇気の周辺に概念として“役割実験に必要な勇気”、“誠実”、“冒険心”、“評価懸念”尺度が作成され、それぞれ高い信頼性が得られた。研究2においては、基準関連妥当性の検討のため既存の尺度との相関分析を行い、おおむね高い相関が見られ、選択場面における勇気尺度および勇気の周辺概念尺度が漸成発達理論と大いに関連があることが示唆された。

Erikson, E. H. は、“青年たちは本来一時的な実存主義者の資格がある (Evans, 1961 岡堂・中園訳 1975, pp.48)”と述べている。青年は、青年

期において自己の存在の意味を問い、葛藤を経験する。それこそが青年期の主題がアイデンティティの獲得である所以であり、青年は皆アイデンティティの問題に取り組み、自らの進むべき道へと歩む覚悟をしなくてはならない。しかしながら、小此木 (1978) の指摘するように、オトナにならない青年は主体的な選択を先送りにしてしまい、いつまでもモラトリアムから脱することができない。本研究において提示された選択場面における勇気は、青年が青年期から脱するために必要な力を漸成発達理論の枠組みから考察することができるものであると言える。今後の研究にて、青年たちがアイデンティティの問題に取り組み、成人の世界に飛び込んでいくために、選択場面における勇気の獲得がどのようなはたらきをしており、人格発達のプロセスでどのように獲得することができるのかといった問題を検討することが望まれる。

### 今後の課題

本研究においては、立教大学の大学生のみを対象としているため、本研究の結果を現代青年の特質として一般化することはできない。よって、今後の研究において層化多段抽出法などといった手法を用いた広範なサンプリングを行った研究の必要性がある。さらに、本研究にて作成した尺度と漸成発達理論との関連が明らかになったが、今後の研究において共分散構造分析などを用いた選択場面における勇気の発達因などに関する検討が必要だろう。さらに、それらの量的なデータによる検討に加え、面接調査などを用いた質的なデータによる具体的なレベルでの現代青年の勇気に触れる研究が望まれる。

### 引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. Norton.  
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and lifecycle: Se-*

- lected papers*. In *Psychological Issues*. Vol. 1. International Universities Press.  
(エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility*. Norton.  
(エリクソン, E. H. 鑑 幹八郎 (訳) (1971). 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York, Norton.  
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ——青年と危機—— 金沢文庫)
- Evans, R. I. (1961). *Dialogue with Erik Erikson*. Harper & Row.  
(エバンス, R. I. 岡堂哲雄・中園正身 (訳) (1975). エリクソンとの対話 金沢文庫)
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76.  
(Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. (2003). The development of a simplified version of Ochse & Plug's Erikson and Social-Desirability Scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.)
- 西平直喜 (1990). 成人になること 東京大学出版会  
(Nishihira, N.)
- 小此木啓吾 (1978). モラトリアム人間の時代 中央公論社  
(Okonogi, K.)
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究——現代日本青年の心情モデルについての検討—— 教育心理学研究, **32**, 12-21.  
(Ono, H. (1984). The fulfillment sentiment in contemporary adolescence: An examination of the sentiment model for contemporary Japanese adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **32**, 100-109.)
- 大野 久 (編) (2010). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房  
(Ono, H.)
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (2004). *Human strength: A classification manual*. Washington, DC. American Psychological Association.
- Peterson, C. (2006). *A primer in positive psychology*. Oxford University Press, Inc.  
(ピーターソン, 宇野カオリ (訳) (2010). 実践入門 ポジティブ・サイコロジー——“よい生き方”を科学的に考える方法—— 春秋社)
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44.  
(Tani, F. (1998). The relationship between sense of basic trust and time perspective in adolescence. *The Japanese Journal of Developmental Psychology*, **9**, 35-44.)
- 谷 冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 310.  
(Tani, F.)
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.  
(Tani, F. (2001). Structure of the sense of identity in adolescents: Development of the multidimensional Ego Identity Scale (MEIS). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 265-273.)
- 2010.9.30 受稿, 2010.12.14 受理——